

「日本音楽学会国際研究発表奨励金」受領者報告書

久岡 加枝

発表学会について

学会名 The Seventh International Symposium on Traditional Polyphony

開催期間 2014年9月22日～9月26日

開催地 トビリシ音楽院、グルジア（ジョージア）

上記の学会は、1986年にコーカサス屈指の名水の都ボルジョミで開催されたユーラシア地域の民俗的な多声楽に関する国際学会に開催起源を持つものであり、ソ連崩壊後の混乱期中断を経て、グルジアの多声楽がユネスコの世界無形文化遺産に登録され、トビリシ音楽院に多声楽の専門の研究機関が開設された2002年以降、隔年開催されるようになったものである。今回も例年のように、開催国のグルジアをはじめ、欧米や東アジア、旧東側諸国を含むさまざまな地域の研究者が参加し、J・ジョルダーニア氏を中心に、さまざまな地域の多声楽に関する事例を基に、それらの研究方法を中心に議論が行われた。やはり開催地域柄か、ロシアやカザフスタン、アゼルバイジャンやリトアニアなどの旧ソ連からの参加者が多く、シンポジウムの公用語は、一応、英語とグルジア語と定められていたのだが、セッションの合間にはロシア語による会話も目立ち、開催期間中は、多言語空間にしばし身を置くこととなった。

当学会への参加は2度目であり、前回の報告は、多声楽以外にも多様な音楽的特性を持ったサブエスニック集団からなる「グルジア人」の音楽文化研究において、多声楽と民族性の結びつきを強調する近年の研究傾向には無理があるのではないかという批判に基づくものであり、グローバル化の中で、民族文化の正統性を主張する必要に迫られている現地の研究者の立場を無視したヘイトスピーチとも捉えかねられない内容であった。こうした失態にも関わらず、今回も発表・参加させていただくことができた背景には、伝統多声楽

研究センターの所長で、報告者の留学期間中のホスト教員であった R・ツルツミア教授が、多民族社会という観点から、多声楽などのグルジアないしコーカサス地域の音楽文化を研究する意義を意外にも理解してくださっていたことがあった。

今回の大会では、現地の若手研究者を中心とする、イスラエルのグルジア・ユダヤ人のコミュニティや、国内のバプテストなどのコーカサスのエスニック・マイノリティの音楽に関する画期的な報告も目立ち、国外の参加者からも喝采を受けていたことは、前回の自分の意見が反映されていたようでうれしかった。報告者は、上記の音楽院への留学を含む旧ソ連での生活期間が長く、グルジア語やロシア語による口頭会話にはある程度慣れているものの、英語に関しては不得手であり、今回も、質問に受け答えできるだろうかと終始緊張していたのだが、セッション司会の I・ゼムツォーフスキイ氏に非常に気を使っていたが、無事発表を終えることができた。

研究発表要旨

セッション名 Regional Styles and Musical Language of Traditional Polyphony

日時 2014年9月23日 16:30~17:00

発表タイトル The Origin of the Bass Drone in Georgian Polyphony: The Historical Role of Wandering Musicians

本報告は、報告者がこれまでグルジアおよび北コーカサス地域の民俗音楽についてフィールドないし文献調査を行う中で独自に思い描くようになった、この地域で広く演奏されるドローン（持続低音）を発するバグパイプやズルナ、ドウドゥクといったダブルリード楽器の音響が、さまざまな宗教や言語の異なる集団の民俗的な多声楽に共通するドローン・ポリフォニーの形成に何らかの影響を与えてきたのではないかという仮説に基づくものである。ダブルリードの祖先と考えられる楽器は、グルジアの文献においては、12世紀の詩人、ショタ・ルスタヴェリの作品『豹皮の勇士』の中で、すでに現在の演奏スタイル

のように、打楽器と共に登場するが、こうした楽器は、グルジア人以外にも、アルメニア人やアゼルバイジャン人や北コーカサス諸民族の他、ユダヤ人やクルド人、テレク川流域のコサックなどの地域を超えた文化的繋がりを持つ「流動的」な集団の間にも広まっている。

こうした楽器の他、コーカサスの民俗的な多声楽におけるドローンの媒介を考える上で、かつてユダヤ教文化が栄えたグルジア北西部ラチャ地方を拠点に、南北コーカサスを放浪していたマルチリンガルなバグパイプの職業演奏家の活動はとりわけ重要であろう。

農村の伝統的な民衆の社会生活と結びついた多声楽の研究に傾きがちな従来のグルジアの音楽研究において、こうした跨境的な「職業演奏家」の要素は度外視される傾向にあり、彼らの出自や社会的身分に関しても不明な点が多いが、本報告では、ラチャの他、ムツヘタなどの古くからユダヤ人のコミュニティが多く暮らす地域を中心に、皮なめしの技術を必要とし、旧約聖書のエピソードに基づく即興詩をレパートリーとした彼らの活動が、中世以前からのコーカサスにおけるユダヤ人（グルジーム）の文化と結びついていた可能性の指摘も行った。

反響、感想など

S・アロム氏らの研究グループによるゲラティ修道院の聖歌に関する目玉となる報告の後だったため、集客数はやや減り、さらに本報告の後にはB・ネトル氏のスカイプを通じた公演が差し迫っており、非常に時間が積んでいたが、現地や欧米の研究者から批判や質問なども数多く寄せられた。

特に現地の研究者からは、特に、バグパイプとユダヤ文化の結びつきなどは根拠に乏しく信じがたい説であるという批判を受けることとなったが、こうした漠然とした素朴な仮説にも関わらず、ジョルダーニア氏からは、ドローン・ポリフォニーの起源に関しては、

Rudolf Brandl (2008)¹のように西暦 1000 年頃の比較的新しいものではないかとする見解もあるが、本報告が指摘するように、西アジアから中東欧地域を中心に世界中に離散していった古い民族集団の音楽文化との結びつきも考えられるだろうというご指摘を頂いた。

本学会にはこうした研究発表以外にも、コンサートや観光など興味深い企画が数多く設けられており、特にセッションの後、音楽院のホールで開催されたコンサートでは、グルジア国内のさまざまな地域集団の多声楽をはじめ、チェチェン系マイノリティの儀礼歌や、ラトヴィアやウクライナといった近隣諸国の民謡や、さらには台湾などからの珍しい芸能の上演が連日行われ、こちらも充実した内容であった。

本大会への連日参加を通じて、現地の研究者だけでなく、この地域の文化研究に携わる世界のさまざまな研究者にとって、より興味深い内容の研究を今後、英語で発表していくことの必要性を実感した。このような貴重な機会を与えてくださった住友生命保険相互会社ならびに日本音楽学会に心から感謝を申し上げたい。

¹ Rudolf Brandl, "New Consideration of Diaphony in Southeast Europe," in Ardian Ahmedaja and Gerlinde Haid, eds., *European Voices I: Multipart Singing in the Balkans and the Mediterranean* (Weimar: Böhlau Verlag Wien Köln, 2008), pp. 281-297 では、かつてのビザンツ帝国の辺境に広まる、14-16Hz の不協和音に基づくドローン・ポリフォニーが、こうした地域の同様の音響を持つ鐘に由来する可能性が指摘される。